

法 性 寺 跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一〇―一

法性寺跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

法 性 寺 跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、電波暗室建設工事に伴う法性寺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

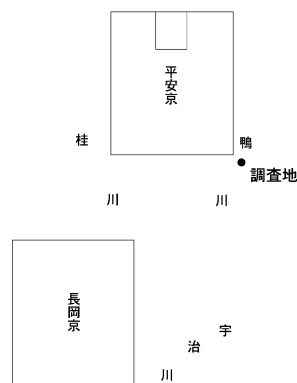
平成 22 年 12 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 法性寺跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市東山区福稲上高松町 60 番地 |
| 3 委 託 者 | 株式会社 竹中工務店京都支店 支店長 長谷川 齋 |
| 4 調査期間 | 2010 年 8 月 30 日～ 2010 年 10 月 2 日 |
| 5 調査面積 | 約 423 m ² |
| 6 調査担当者 | 布川豊治 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「京都駅」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 布川豊治 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	4
(1) 基本層序	4
(2) 遺構の概要	4
(3) 弥生時代の遺構	4
(4) 古墳時代の遺構	13
(5) 平安時代から鎌倉時代の遺構	14
(6) 江戸時代とその他の遺構	16
4. 遺 物	17
(1) 出土遺物の概要	17
(2) 弥生時代の土器	17
(3) 平安時代の土器	21
(4) 瓦類	22
(5) その他の出土遺物	22
5. ま と め	25

図 版 目 次

図版1	遺構	1 調査区全景 弥生時代から古墳時代（東から）
		2 溝 33（南東から）
		3 土坑 5 土器出土状況（南東から）
		4 土坑 19 土器出土状況（北西から）
図版2	遺構	1 方形周溝墓 2（南西から）
		2 竪穴住居（南から）
図版3	遺構	1 調査区全景 平安時代から江戸時代（東から）
		2 溝 22（北から）

3 墓 26 (南から)

図版 4 遺物 弥生土器

図版 5 遺物 土師器・須恵器・軒丸瓦

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図 3	調査前全景 (北西から)	3
図 4	調査風景 (南西から)	3
図 5	調査区断面図 (1 : 100)	5
図 6	弥生時代から古墳時代の遺構平面図 (1 : 150)	6
図 7	平安時代から鎌倉時代の遺構平面図 (1 : 150)	7
図 8	溝 33 断面図 (1 : 40)	8
図 9	土坑 5 実測図 (1 : 20)	8
図 10	方形周溝墓 1・2 実測図 (1 : 100)	9
図 11	方形周溝墓 3・7 実測図 (1 : 100)	10
図 12	方形周溝墓 4・5 実測図 (1 : 100)	11
図 13	方形周溝墓 6 実測図 (1 : 100)	11
図 14	方形周溝墓 8 実測図 (1 : 100)	12
図 15	土坑 19 実測図 (1 : 20)	12
図 16	竪穴住居実測図 (1 : 50)	13
図 17	墓 26 実測図 (1 : 20)	14
図 18	落込み 20 断面図 (1 : 40)	15
図 19	溝 22 断面図 (1 : 40)	15
図 20	柱穴列実測図 (1 : 40)	16
図 21	溝 33・土坑 5 出土土器実測図 (1 : 4)	18
図 22	溝 1 出土土器実測図 (1 : 4)	19
図 23	溝 2 出土土器実測図 (1 : 4)	20
図 24	溝 21・24 出土土器実測図 (1 : 4)	20
図 25	溝 34・土坑 19 出土土器実測図 (1 : 4)	21
図 26	墓 26 出土土器実測図 (1 : 4)	22

図 27 軒丸瓦拓影・実測図（1：4）	22
図 28 鉄釘実測図（1：2）	22
図 29 鉄釘	22
図 30 石剣実測図（1：2）	23
図 31 石剣	23
図 32 炭化米	23

表 目 次

表 1 遺構概要表	4
表 2 遺物概要表	17
表 3 弥生土器一覧表	24

法性寺跡

1. 調査経過

調査地は京都市東山区福稲上高松町 60 番地に所在する任天堂株式会社敷地内である。この敷地の北西部に任天堂京都リサーチセンター電波暗室が建設されることとなった。当地は周知の遺跡である法性寺跡内にあることから、建設工事に先立って、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が試掘調査を実施し、基盤層上面で弥生時代の遺構を確認した。このため、発掘調査が必要と判断され、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

調査は 2010 年 8 月 30 日から開始した。まず調査地のアスファルトを除去した後、文化財保護課の指導に基づき、東西約 29.6 m、南北約 14.3 m の長方形の調査区を設定した。調査面積は 423 m² である。地表下 0.2 ～ 0.9 m までは機械で掘削を行い、その後は人力により掘削を行った。調査区の西側約 1 / 4 には平安時代の包含層の分布を認めたので、その上面で遺構精査を行ったが、

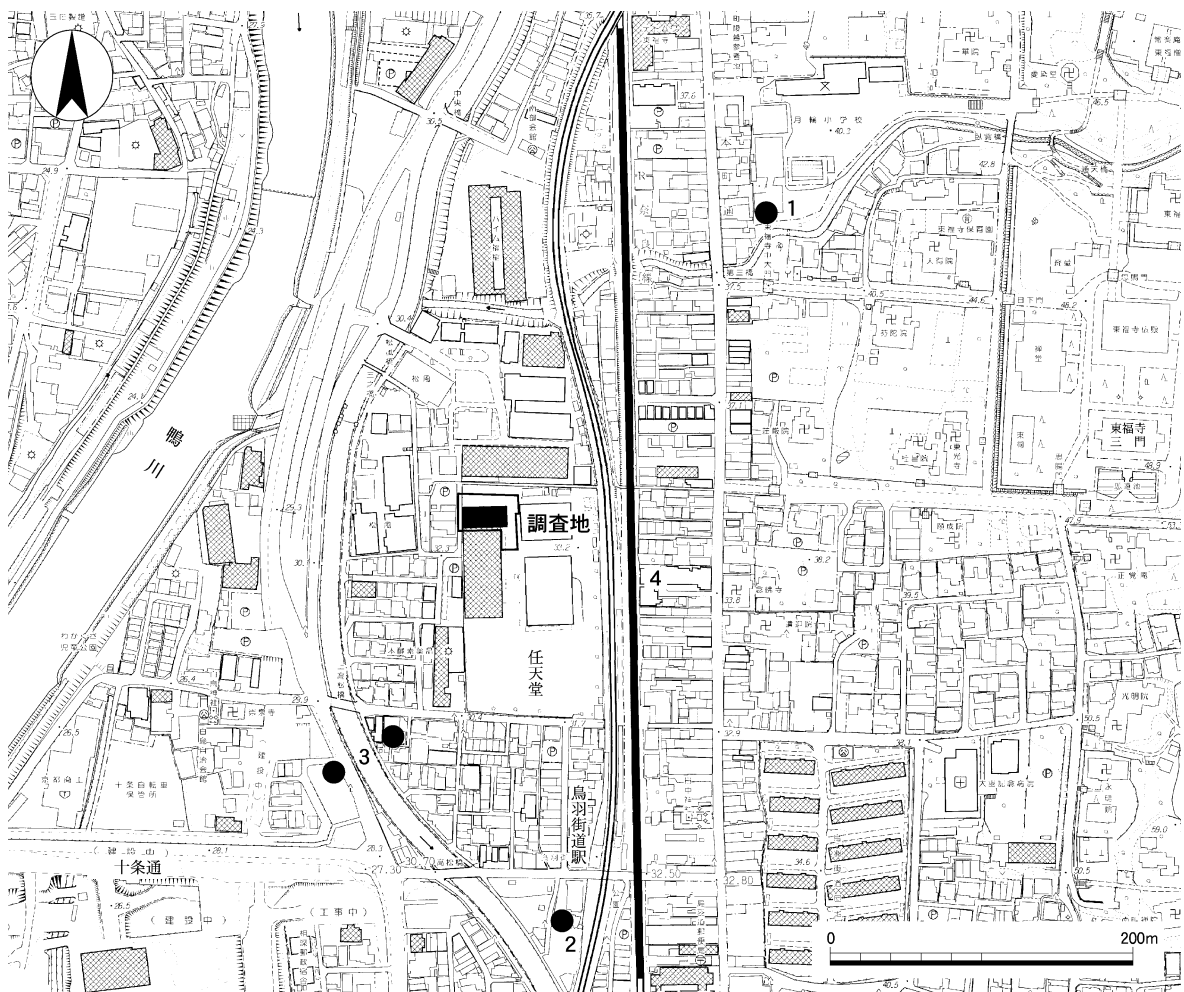


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

遺構を検出できなかったため、基盤層まで掘り下げ、遺構を検出した。遺構としては、弥生時代の方形周溝墓・溝・土坑、古墳時代の竪穴住居、平安時代の墓・落ち込み・土坑・溝、鎌倉時代の溝・土坑、江戸時代の土坑などを検出した。発掘中は逐次、文化財保護課の検査・指導を受け、遺構掘削、遺物採取、写真撮影、図面の記録を取り、調査を進め、10月2日に全ての現地作業を終了した。

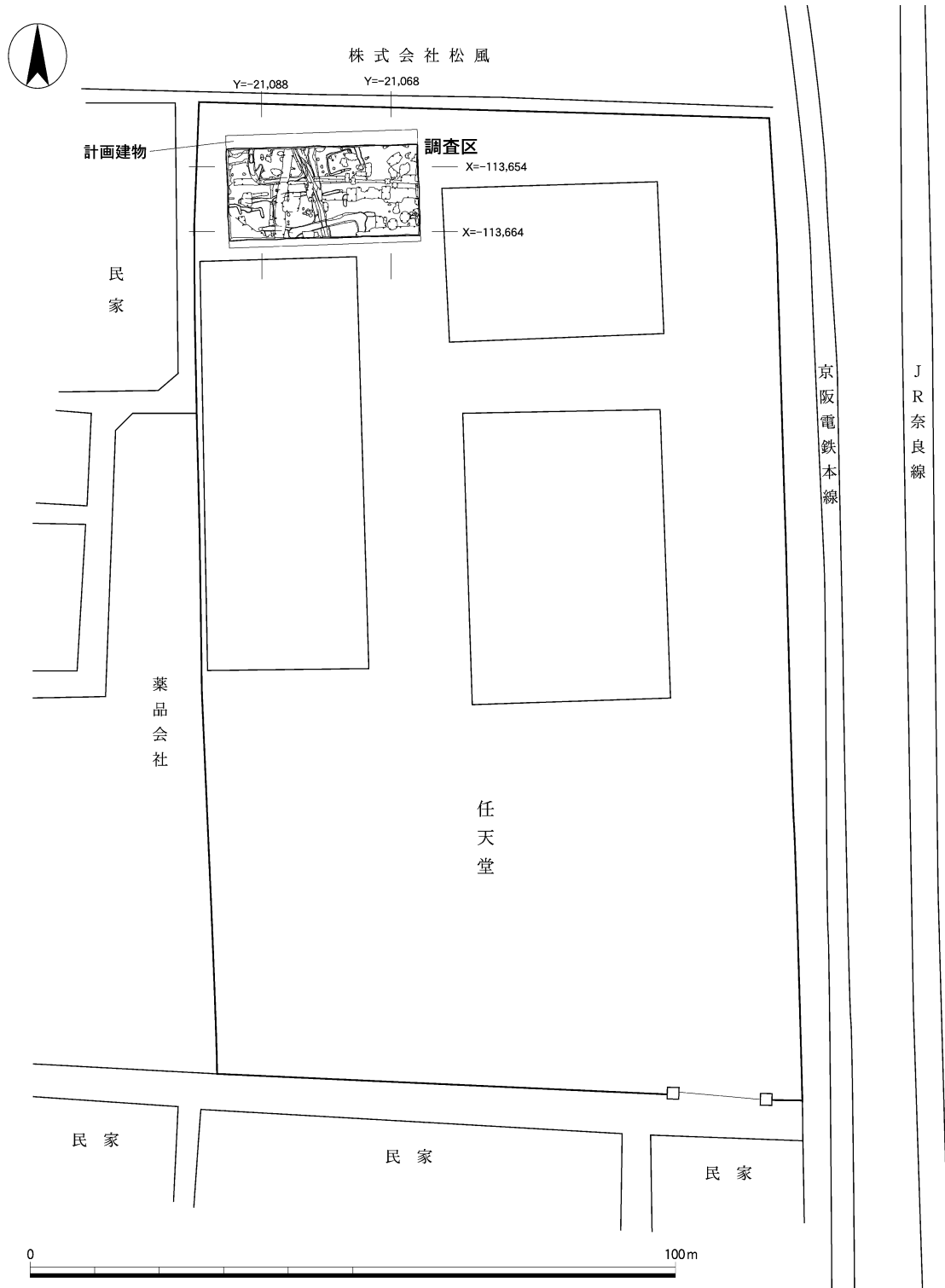


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は、京都盆地南東部の鴨川左岸、東山西側の台地上にある。当地は任天堂株式会社敷地内の北西部、東福寺三門より西へ約 450 m の地点に位置し、法性寺跡の一部に推定されている。法性寺は藤原忠平により延長 3 年（925）前後に創建された藤原氏の氏寺である。その後、延応元年（1239）法性寺域に九条道家により東福寺が造営され、法性寺は衰退していったが、現在も浄土宗禅林寺派の寺院としてその法灯を伝えている。

(2) 周辺の調査

調査地周辺では、これまで幾度かの調査を実施している。月輪小学校の 1980 年の調査（図 1 - 1）では、弥生時代の溝、平安時代後期の土坑 1 基、室町時代の井戸 1 基などを検出している。京阪電鉄烏羽街道駅南の新十条通建設に伴う 1997 年の調査（図 1 - 2）では、弥生時代中期の流路、鎌倉時代の東西溝などを検出している。高松町の下水道埋設工事に伴う 1987 年の立会調査（図 1 - 3）では、弥生時代中期の流路を検出している。本町 17 ～ 22 番地の JR 奈良線複線化工事に伴う 1999 年の立会調査（図 1 - 4）では、弥生時代の包含層を確認している。

引用文献

『京都市遺跡地図台帳』【第 8 版】京都市文化市民局 2007 年

『京都の地名』日本地名体系 27 平凡社 1979 年

「法性寺跡」『昭和 55 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 刊行予定

「法性寺跡・正覚寺跡」『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991 年

「法性寺跡・鳥野辺跡・正覚寺跡」『平成 8 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1998 年

「法性寺跡・貞観寺跡」『平成 11 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002 年



図 3 調査前全景（北西から）



図 4 調査風景（南西から）

3. 遺 構

(1) 基本層序

調査地は駐車場として使用されていたため、厚さ 0.2 m 前後のアスファルト舗装であった。層序は調査区北壁では、アスファルト下より地表下約 0.6 m までが現代盛土である。以下は順に、中世から近世の包含層（厚さ 0.1 ～ 0.4 m）である黒褐色砂泥（図 5 - 4・5 層）、平安時代の整地層（厚さ 0.1 ～ 0.3 m）である黒褐色砂泥（同 14 ～ 18 層）、その下は基盤層の黄褐色砂泥・黒褐色砂泥（同 30 ～ 33 層）が堆積する。

(2) 遺構の概要

調査は基盤層上面を遺構面として行った。その標高は、調査区北東隅で約 33.1 m、同南西隅（落込み 20 上面）で約 32.1 m であり、北東から南西に傾斜する。検出した遺構は、総数 109 基であり、弥生時代から江戸時代にかけてのものである。その他に調査区中央部を中心にピットや土坑群を多く検出したが、大半のものは遺物が小片かあるいは出土しなかったため時期不明のものが多い。時期を確認できた遺構は、多い順に弥生時代、平安時代、鎌倉時代前期、古墳時代であり、江戸時代は土坑 1 基である。以下、時代の古い順に述べる。

(3) 弥生時代の遺構（図 6、図版 1 - 1）

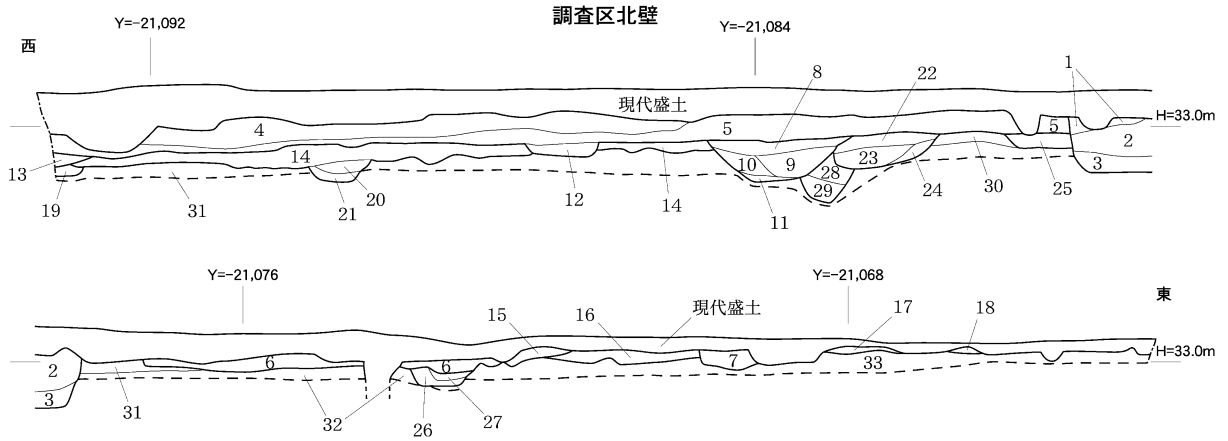
溝、方形周溝墓、土坑を検出した。

溝 33（図 8、図版 1 - 2） 調査区中央部で検出した北で少し西に振れる南北溝である。断面形は外へ開く U 字形状である。規模は、検出長が約 14.8 m、幅 1.5 ～ 1.6 m、深さ約 0.7 m を測る。埋土は黒褐色・暗褐色砂泥を主体とする。弥生時代前期の土器が出土した。

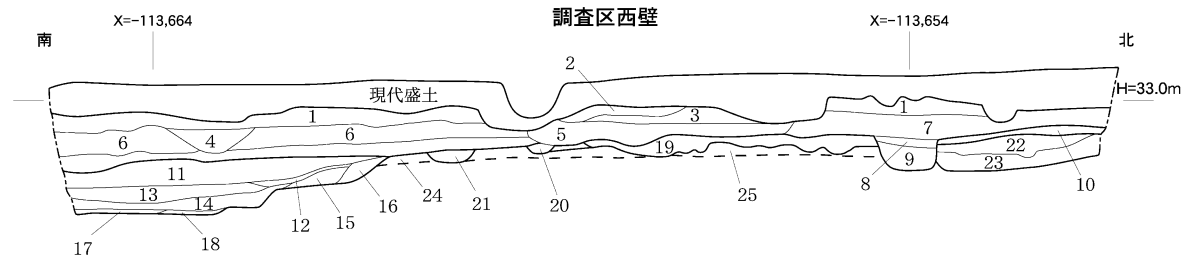
土坑 5（図 9、図版 1 - 3） 調査区北西部で検出した。平面形は円形であり、北側の一部が削平されている。内部には口縁を北西方向に向けた壺が横位で据わっていた。規模は径 0.5 ～ 0.6 m、

表 1 遺構概要表

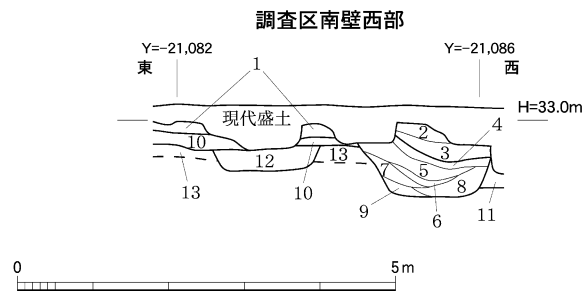
時 代	遺 構	備 考
弥生時代	方形周溝墓 1 ～ 8、土坑 3 ～ 5・19、溝 33・56	土坑 5・19 は土器が据わる。
古墳時代	竪穴住居	
平安時代中期 ～鎌倉時代前期	墓 26、土坑 8・27・30・39・57・67・103、 落込み 20、溝 22・49	
江戸時代	土坑 29	
時期不明	柱穴列（柱穴 41・84・86）	



- | | | |
|-----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 1 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 (土坑29) | 12 10YR3/3 暗褐色砂泥 (土坑8) | 23 7.5YR2/1 黒色砂泥、やや粘質 (溝2) |
| 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 (土坑29) | 13 7.5YR2/2 黒褐色砂泥 | 24 10YR3/2 黒褐色砂泥 (溝2) |
| 3 10YR3/4 暗褐色砂泥 (土坑29) | 14 10YR2/3 黒褐色砂泥 | 25 7.5YR2/3 極暗褐色砂泥 (溝62) |
| 4 7.5YR3/1 黒褐色砂泥 | 15 10YRR3/2 黒褐色砂泥 | 26 10YR2/2 黒褐色砂泥 (溝46) |
| 5 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 | 16 2.5Y2/1 黒色砂泥 | 27 10YR2/3 黒褐色砂泥 (溝46) |
| 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝109) | 17 7.5YR2/1 黒色砂泥 | 28 10YR2/3 黒褐色砂泥 (溝33) |
| 7 7.5YR3/2 黒褐色砂泥、土師器含む (土坑) | 18 7.5YR3/1 黒褐色砂泥 | 29 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 (溝33) |
| 8 7.5YR2/3 極暗褐色砂泥 (溝22) | 19 10YR3/3 暗褐色砂泥 (溝1) | 30 10YR2/3 黒褐色砂泥 (基盤層) |
| 9 10YR3/3 暗褐色砂泥 (溝22) | 20 10YR2/2 黒褐色砂泥、やや粘質 (溝2) | 31 10YR3/3 暗褐色砂泥 (基盤層) |
| 10 10YR2/2 黒褐色砂泥 (溝22) | 21 7.5YR2/2 黒褐色砂泥、粘質 (溝2) | 32 2.5Y5/4 黄褐色砂泥 (基盤層) |
| 11 10YR2/3 黒褐色砂泥 (溝22) | 22 10YR2/2 黒褐色砂泥 (溝2) | 33 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (基盤層) |



- | | | |
|-------------------------|----------------------------------|--------------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 10 7.5YR2/2 黒褐色砂泥、土器含む | 18 7.5YR3/2 黒褐色砂泥、やや粘質 (落込み20) |
| 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 11 10YR3/2 黒褐色砂泥 (落込み20) | 19 7.5YR2/2 黒褐色砂泥、やや粘質 (土坑7) |
| 3 7.5YR2/2 黒褐色砂泥、やや粘質 | 12 10YR2/3 黒褐色砂泥 (落込み20) | 20 7.5YR3/4 黒褐色砂泥 (溝12) |
| 4 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 13 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 (落込み20) | 21 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (溝13) |
| 5 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 14 10YR4/4 褐色砂泥、やや粘質 (落込み20) | 22 10YR2/3 黒褐色砂泥、土器多く含む (溝1) |
| 6 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 15 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 (落込み20) | 23 10YR3/3 暗褐色砂泥 (溝1) |
| 7 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 | 16 10YR3/1 黒褐色砂泥 (落込み20) | 24 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (基盤層) |
| 8 7.5YR3/3 暗褐色砂泥 (土坑30) | 17 7.5Y4/2 暗灰黄色粗砂、粘質土混じる (落込み20) | 25 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (基盤層) |
| 9 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 (土坑30) | | |



- | |
|------------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 3 10YR3/3 暗褐色砂泥 |
| 4 10YR2/2 黒褐色砂泥 (溝22) |
| 5 10YR2/3 黒褐色砂泥 (溝22) |
| 6 10YR3/2 黒褐色砂泥、やや粘質 (溝22) |
| 7 10YR3/4 暗褐色砂泥、粘質 (溝22) |
| 8 7.5YR3/3 暗褐色砂泥、やや粘質 (溝22) |
| 9 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝22) |
| 10 10YR3/3 暗褐色砂泥、やや粘質 |
| 11 10YR3/3 暗褐色砂泥、やや粘質 (土坑32) |
| 12 7.5Y2/3 極暗褐色砂泥、やや粘質 (溝34) |
| 13 7.5Y4/4 褐色砂泥 (基盤層) |

図5 調査区断面図 (1:100)

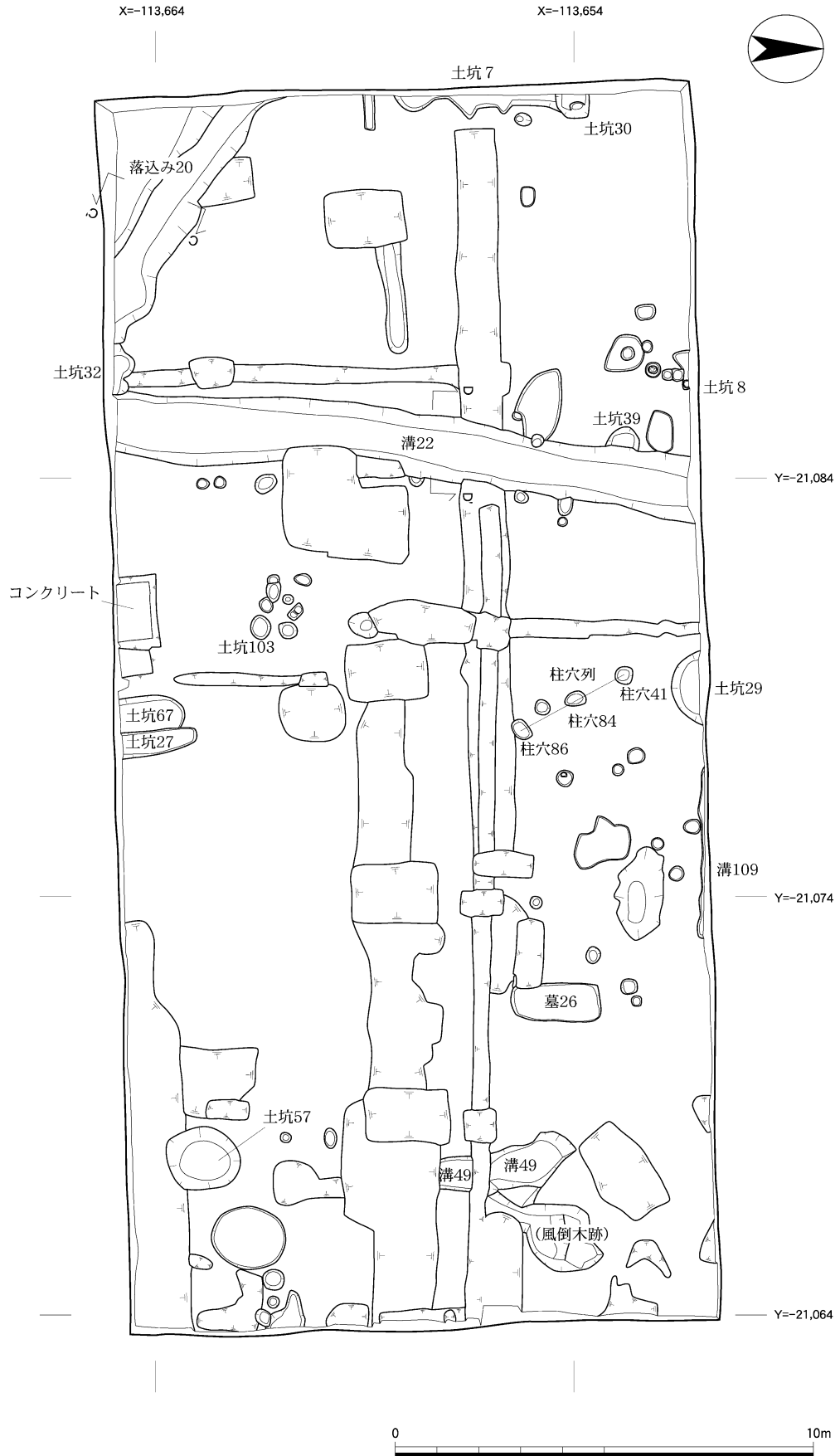


図7 平安時代から鎌倉時代の遺構平面図 (1 : 150)

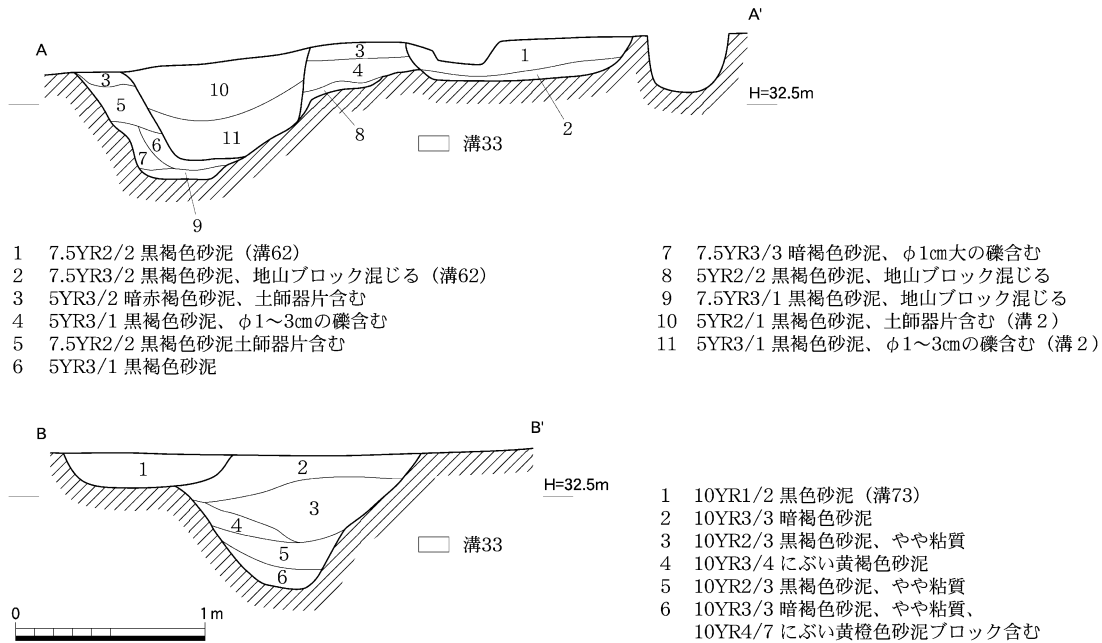


図8 溝33断面図 (1:40)

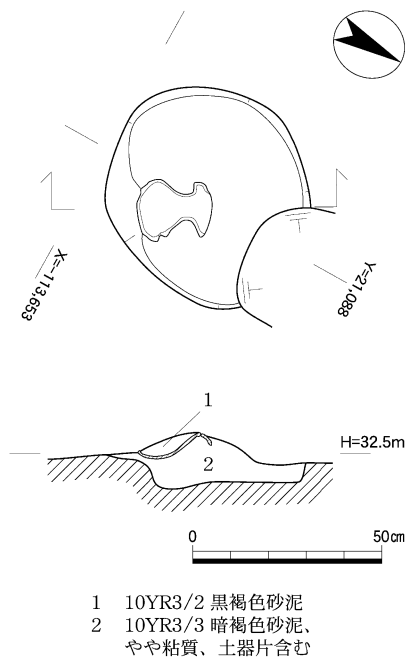


図9 土坑5実測図 (1:20)

深さ約0.15m、埋土は暗褐色・暗褐色砂泥である。壺の時期は弥生時代前期である。

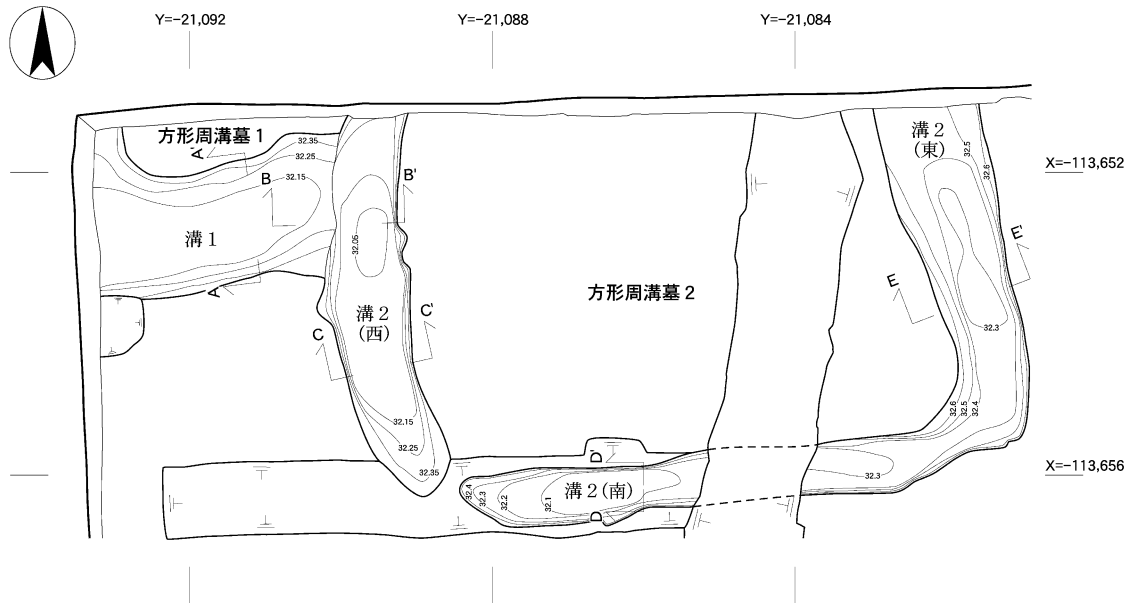
土坑4 調査区北西部で検出した。平面形は不定形であり土坑3に西側を削平されている。規模は検出長約2m、幅0.1~0.4m、深さ約0.1mを測る。埋土は黒褐色砂泥である。

土坑3 調査区北西部で検出した。平面形は長方形で南側を溝2に削平される。規模は検出長が約2.3m、幅0.6~0.8m、深さ約0.1m、埋土は暗褐色砂泥である。

方形周溝墓群 (1~8) 調査区中央部から西部で検出した。墳丘および主体部は後世に削平されて残存していなかった。1~6は周溝を共有、あるいは一定の幅を保って溝を並行させていることから、ほぼ同時期のものと考えられる。一部は隅に陸橋がある。7も方形周溝墓である

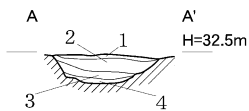
可能性が高く、調査区外西側に展開すると考えられる。時期は出土遺物から弥生時代中期から後期と考えられる。8は重複関係から最も新しいものである。規模は他のものより大きく、時期は検出状況と出土遺物から弥生時代後期と考えている。また、方形周溝墓3内で検出した溝17・18は、その形状と出土遺物がないことから、周溝ではなく、風倒木跡などであろうと考えている。以下、個別に述べる。

方形周溝墓1 (図10) 調査区北西隅で南側の一部を検出した。溝1・2の周溝に囲まれ、調査区外北側に展開する。墓の規模は東西約3m、溝1の規模は、東西検出長約3.3m、南北検出長約2.2



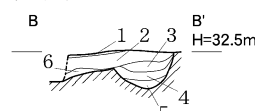
※ 溝内に等高線と標高(m)を図示した。

溝1



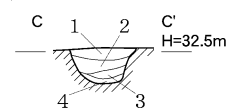
- 1 10YR2/2 黒褐色砂泥、炭微量含む
- 2 10YR2/3 暗褐色砂泥
- 3 10YR2/3 黒褐色砂泥
- 4 7.5YR2/2 黒褐色砂泥、10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥ブロック含む

溝1・溝2(西)



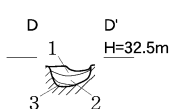
- 1 10YR2/2 黒褐色砂泥、炭微量含む
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 3 7.5YR2/2 黒褐色砂泥 (溝2西)
- 4 7.5YR3/1 黒褐色砂泥 (溝2西)
- 5 7.5YR2/2 黒褐色砂泥、7.5YR5/4 にぶい褐色砂泥ブロック含む (溝2西)
- 6 10YR2/3 黒褐色砂泥

溝2(西)



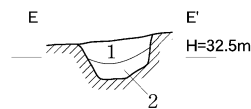
- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 2 7.5YR2/2 黒褐色砂泥、炭微量含む
- 3 7.5YR3/1 黒褐色砂泥
- 4 7.5YR2/2 黒褐色砂泥、10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥ブロック含む

溝2(南)



- 1 7.5YR2/2 黒褐色砂泥
- 2 7.5YR3/1 黒褐色砂泥
- 3 7.5YR2/2 黒褐色砂泥、10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥ブロック含む

溝2(東)



- 1 5YR2/1 黒褐色砂泥、土器片含む
- 2 5YR3/1 黒褐色砂泥、φ1~3cmの礫含む

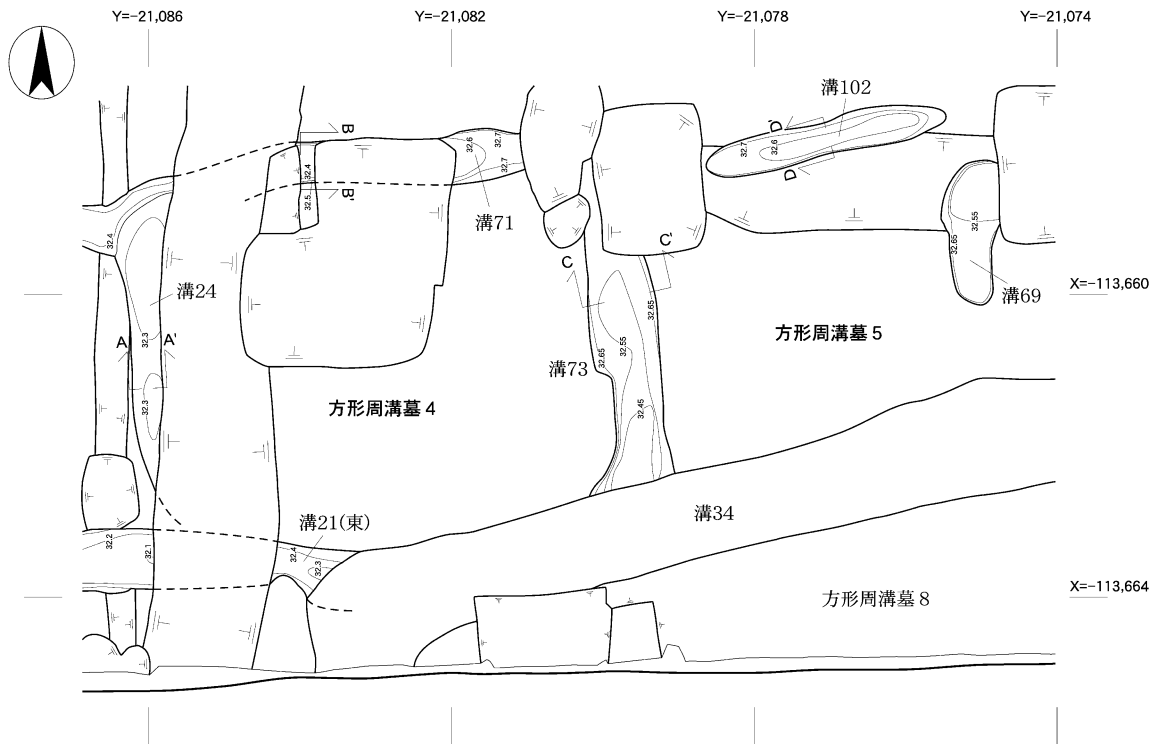


図10 方形周溝墓1・2実測図(1:100)

m、幅1.5~1.8m、深さ約0.4mを測る。溝1の埋土は暗褐色・黒褐色砂泥を主体とする。今回検出した方形周溝墓群の中では一番小さいものである。

方形周溝墓2(図10、図版2-1) 調査区北西部で南半を検出した。方形周溝墓1の東側に位置し、溝2の周溝に囲まれ、調査区外北側に展開する。墓の規模は東西約7m、溝2の規模は、東西約8m、南北検出長5~5.5m、幅0.7~1.4m、深さ約0.5mを測る。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。溝2は南西隅で浅くなって途切れ、陸橋状になる。

方形周溝墓3(図11) 調査区南西部で検出した。方形周溝墓4と7の間に位置し、溝13・14・21・24の周溝に囲まれる。溝14は西端で浅くなって途切れ、陸橋状になり、南西部は削平されている。墓の規模は東西約5m、南北約4mを測る。溝14の規模は東西約6m、幅0.3~0.7



※ 溝内に等高線と標高 (m) を図示した。

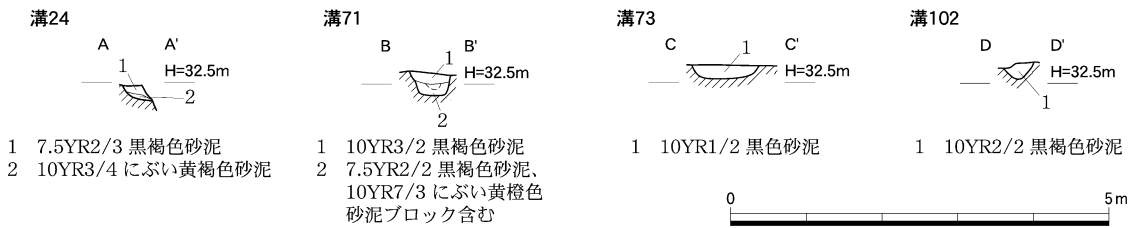
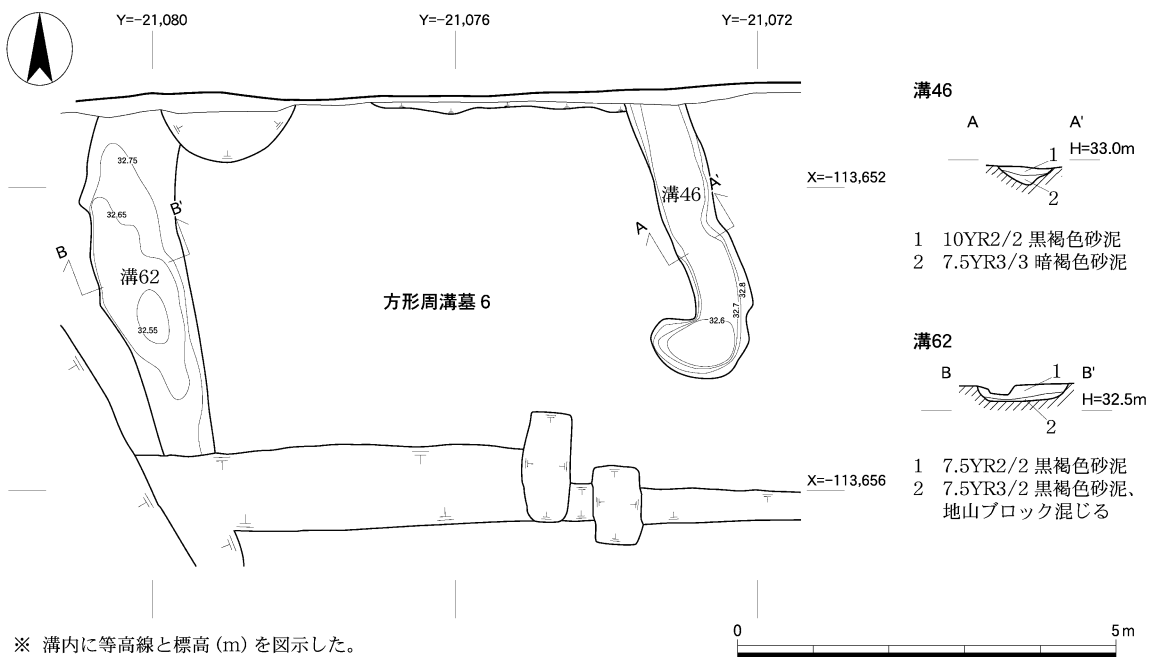
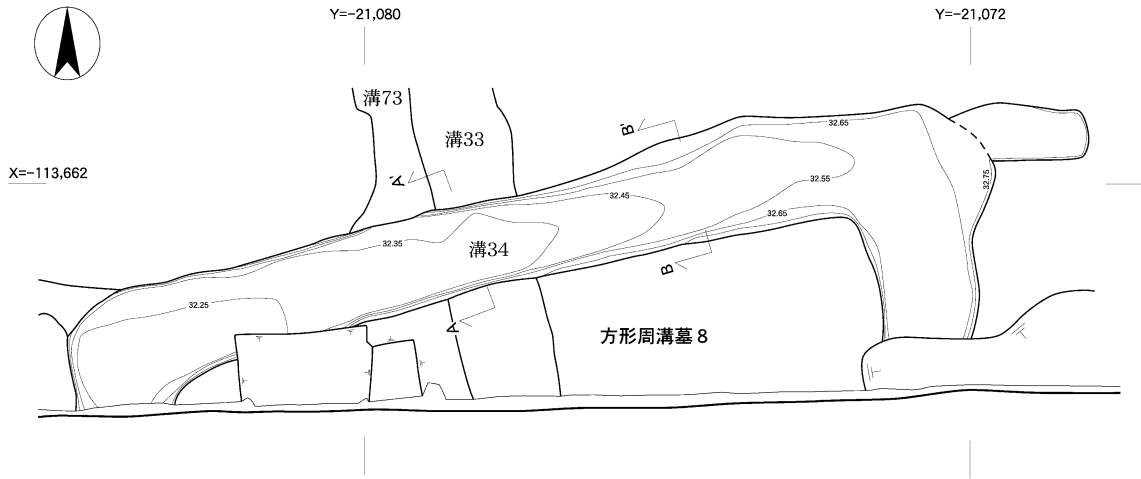


図 12 方形周溝墓 4・5 実測図 (1 : 100)

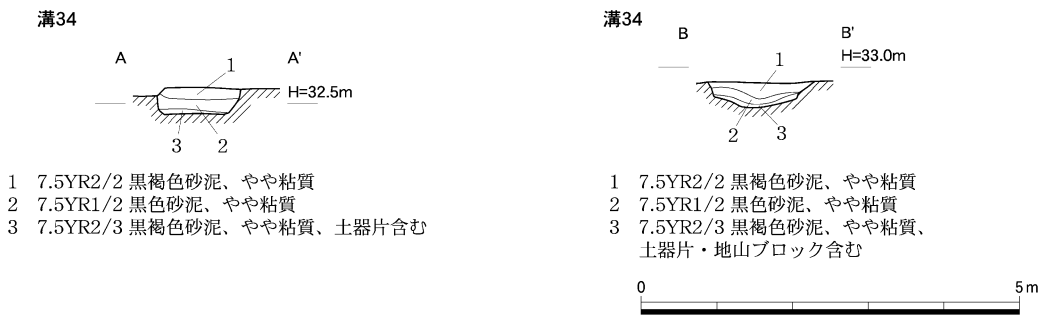


※ 溝内に等高線と標高 (m) を図示した。

図 13 方形周溝墓 6 実測図 (1 : 100)



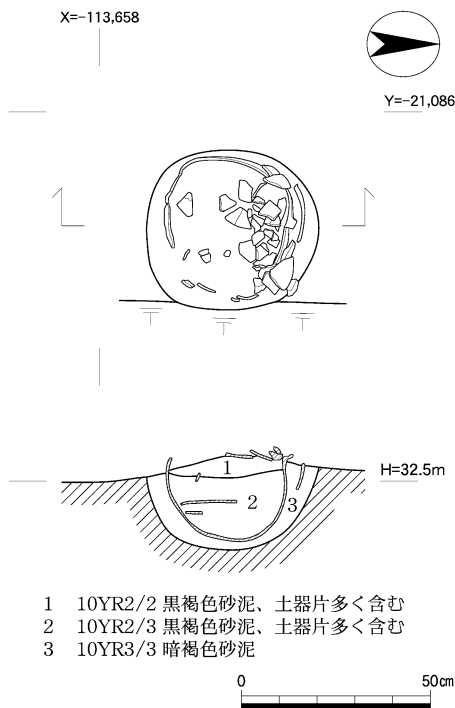
※ 溝内に等高線と標高(m)を図示した。



- 1 7.5YR2/2 黒褐色砂泥、やや粘質
- 2 7.5YR1/2 黒色砂泥、やや粘質
- 3 7.5YR2/3 黒褐色砂泥、やや粘質、土器片含む

- 1 7.5YR2/2 黒褐色砂泥、やや粘質
- 2 7.5YR1/2 黒色砂泥、やや粘質
- 3 7.5YR2/3 黒褐色砂泥、やや粘質、土器片・地山ブロック含む

図 14 方形周溝墓8実測図 (1 : 100)



- 1 10YR2/2 黒褐色砂泥、土器片多く含む
- 2 10YR2/3 黒褐色砂泥、土器片多く含む
- 3 10YR3/3 暗褐色砂泥

図 15 土坑 19 実測図 (1 : 20)

埋土は、溝 46 が黒褐色・暗褐色砂泥、溝 62 が黒褐色砂泥を主体とする。

方形周溝墓 7 (図 11) 調査区南西部で北東部を検出した。方形周溝墓 3 の西側に位置し、L 字状の溝 13 の周溝に囲まれる。南部は削平され、調査区外西側に展開する。墓の規模は不明、溝 13 の規模は検出長が南北約 1.7 m、東西約 1.9 m、幅 0.4 ~ 0.7 m、深さ約 0.1 m を測る。溝埋土はにぶい黄褐色砂泥である。

方形周溝墓 8 (図 14) 調査区中央部南端で検出した。溝 34 の周溝に囲まれ、調査区外南側に展開する。墓の規模は、東西約 9 m、南北検出長約 2.5 m、溝 34 の規模は東西約 12.5 m、南北検出長 1.5 ~ 3.0 m、幅 1.2 ~ 1.5 m、深さ 0.15 ~ 0.3 m を測る。溝埋土は黒色・黒褐色砂泥である。溝 34 は

溝 33 を掘り込んでいます。

土坑 19 (図 15、図版 1- 4) 調査区西部中央で検出した。平面形は円形であり、東端をわずか

に削平されている。内部には口縁を北方向に向けた壺が横位で据わっていた。規模は径約 0.45 m、深さ約 0.25 m、埋土は黒褐色・暗褐色砂泥である。壺の時期は弥生時代後期である。

溝 56 調査区南東部隅で検出した。平面形は L 字状であり、規模は一辺が約 1.6 m、幅は 0.5 ～ 0.6 m、深さ約 0.2 m を測る。埋土は黒褐色砂泥である。後世に削平された方形周溝墓の一部である可能性がある。

(4) 古墳時代の遺構 (図 6、図版 1-1)

竪穴住居 1 棟を検出した。

竪穴住居 (図 16、図版 2-2) 調査区中央部北側で検出した古墳時代唯一の遺構である。基盤層をわずかに掘り込む方形の溝 90 と焼土が残存していたことから竪穴住居と判断した。床面は後世に削平され、残っていなかった。規模は長辺約 4.0 m、短辺約 3.4 m、溝 90 の幅は 0.1 ～ 0.5 m、深さ 1 ～ 2 cm を測る。溝埋土は黒褐色・暗褐色砂泥である。焼土の規模はほぼ円形で径約 0.2 m、厚さはごく薄い。焼土の周りに構築物はなく、竈の痕跡と考えられる。溝 90 から土師器が出土した。出土遺物から、時期は古墳時代後期頃と考える。なお住居内で検出したピット・柱穴は浅く、その位置から、竪穴住居と関連性がないと考えている。

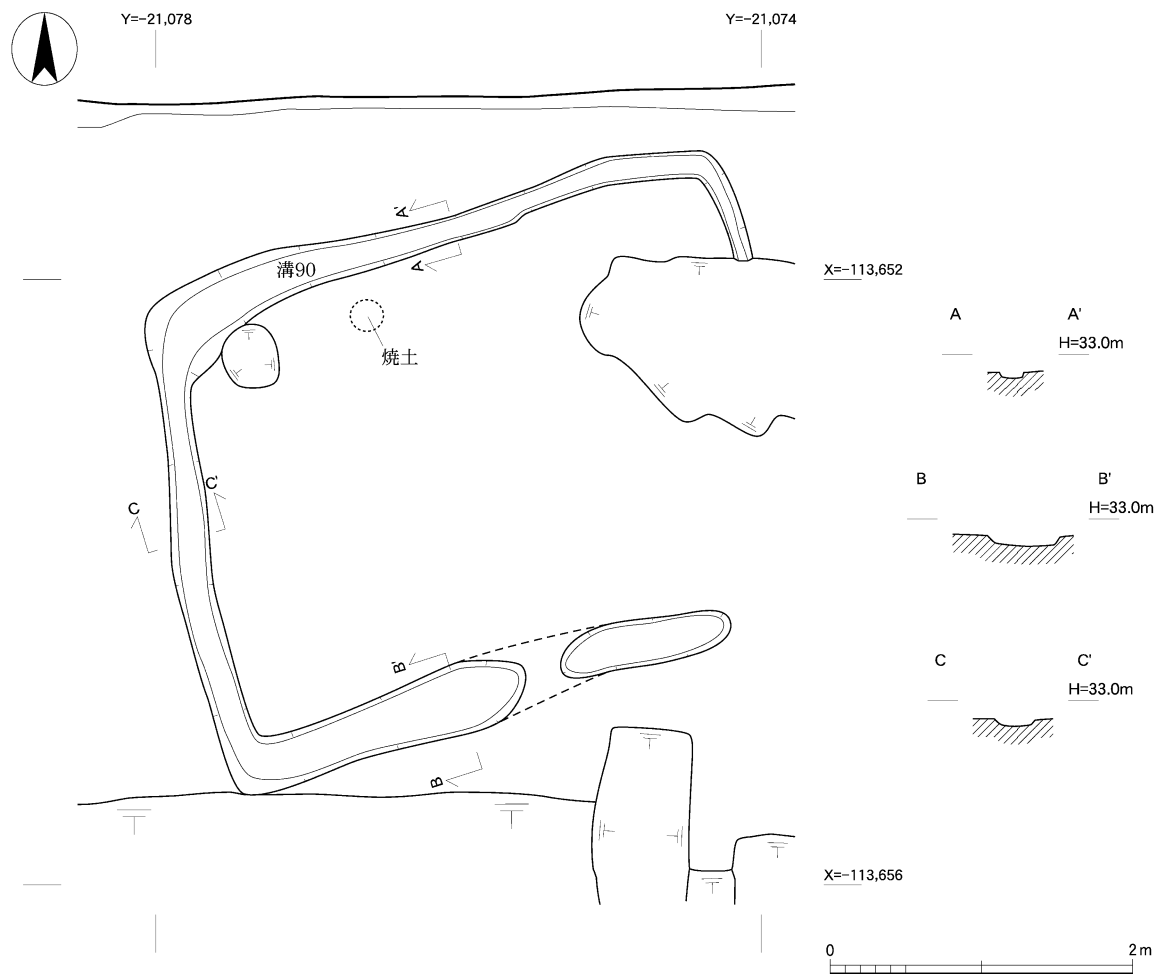


図 16 竪穴住居実測図 (1 : 50)

(5) 平安時代から鎌倉時代の遺構 (図7、図版3-1)

墓、溝、落込み、土坑を検出した。

墓 26 (図 17、図版 3-3) 調査区北東部で検出した。平面形は長方形であり、規模は南北約 2.1 m、東西約 0.9 m、深さ 0.15 ~ 0.2 m を測る。内部には南北約 1.3 m、東西約 0.45 m、厚さ 0.05 ~ 0.1 m の方形に広がる炭層がある。炭には木炭片が混じり、その樹種はモミ属である。埋土は下層が黒褐色・灰褐色砂泥が主体であり、炭層の上は黒褐色砂泥である。出土遺物に木片の付着

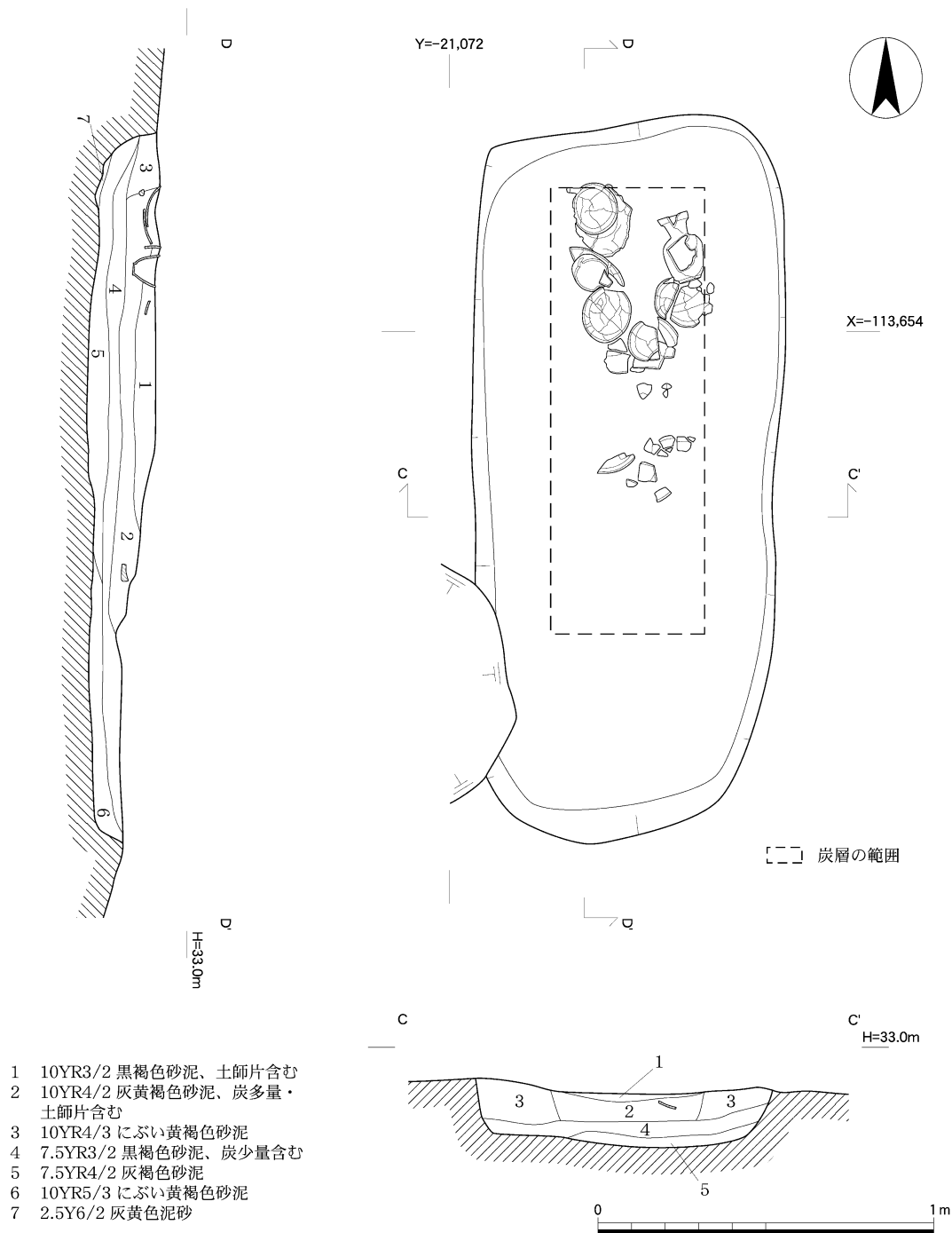


図 17 墓 26 実測図 (1 : 20)

する鉄釘があったことから、木棺墓であると考えられ、木棺の規模は炭層の広がる範囲であろう。副葬品として、土師器皿・杯、須恵器壺などが北部にまとまって出土した。時期は出土土器から平安時代中期（10世紀頃）である。

落込み 20（図 18） 調査区南西隅で北岸を検出した。南と西は調査区外へ展開する。検出長は約 7.5 m、深さ 0.5～0.8 mを測る。北岸には途中に段があり、幅 0.5～1.3 m、高さ 0.2～0.3 mである。埋土は上層が黒褐色・暗褐色砂泥、下層は褐色・灰褐色砂泥を主体する。最下層は厚さ 1 cm前後の粗砂であり、流水の時期があったと考えられる。出土土器から時期は平安時代中期である。

土坑 8 調査区北西部北端で南半を検出した。平面形は不定形であり、規模は東西約 0.9 m、南北検出長約 0.4 m、深さ約 0.1 mを測る。埋土は暗褐色砂泥である。平安時代中期の土師器皿小片が出土した。

土坑 30 調査区北西部西端で東半を検出した。平面形は不明であり、規模は幅約 0.8 m、深さ約 0.4 mを測る。埋土は暗褐色・黒褐色砂泥である。平安時代中期の土師器皿小片が出土した。

土坑 39 調査区北西部で西半を検出した。東半は溝 22 に削平され、平面形は円形の土坑と思われる。規模は径約 0.8 m、深さ約 0.4 m、埋土は黒褐色砂泥である。平安時代の平瓦が出土した。

溝 49 調査区北東部で検出した。南側は攪乱に削平され、北側が広がる南北溝である。断面形は椀状であり、規模は検出長約 3.2 m、幅 1.2～2.3 m、深さ 0.1～0.3 m、埋土は黒褐色砂泥である。平安時代後期の土師器皿小片が出土した。

土坑 67 調査区中央部南端で検出した。東側は土坑 27 に削平され、南は調査区外へ延びる。規模は検出長約 1.5 m、検出幅は約 0.9 m、深さ約 0.15 mを測る。埋土は暗褐色砂泥である。平安時代末期から鎌倉時代初期の土師器皿小片が出土した。

土坑 27 調査区中央部南端で土坑 67 と並行して検出し、南は調査区外へ延びる。規模は検出長約 1.8 m、幅約 0.6 m、深さ約 0.15 m、埋土は黒褐色砂泥である。平安時代末期から鎌倉時代初期の土師器皿小片が出土した。

土坑 57 調査区南東部で検出した。平面形は楕円形である。規模は長径約 1.8 m、短径約 1.5 m、深さ約 0.4 m、埋土は黒褐色砂泥である。平安時代末期から鎌倉時代前期の土師器皿小片が出土した。

溝 22（図 19、図版 3-2） 調査区西部で検出し、北でやや東に振れる南北溝である。断面形は逆台形状で、規模は検出長約 14.9

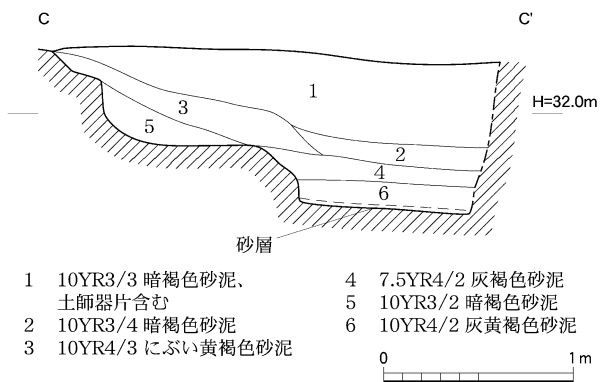


図 18 落込み 20 断面図（1：40）

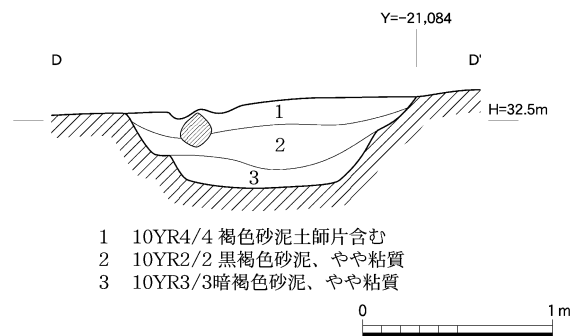


図 19 溝 22 断面図（1：40）

m、幅約 1.3 ～ 1.6 m、深さ約 0.5 mを測る。埋土は黒褐色・暗褐色砂泥を主体とする。時期は出土遺物から鎌倉時代前期である。調査区南壁断面（図 5）の観察では、この溝を境に基盤層上面の高低差は約 0.4 mあり、溝埋土は東から西へ傾斜している。この段差は耕作地の畝である可能性がある。

土坑 103 調査区中央部南側で検出した。平面形は東西方向の楕円形である。規模は長径約 0.6 m、短径約 0.5 m、深さ約 0.1 m、埋土は黒褐色砂泥である。鎌倉時代前期の遺物が出土した。

（6）江戸時代とその他の遺構

江戸時代の土坑 1 基と時期不明の柱穴列などを検出した。

土坑 29 調査区中央部北端で南半を検出した。平面形は半円形、規模は径約 1.8 m、深さ約 0.55 mを測る。埋土は黒褐色・暗褐色砂泥である。時期は出土遺物から江戸時代後期である。

柱穴列（柱穴 41・84・86）（図 20）調査区中央部北側で 2 間分を検出し、柱間は約 1.4 mである。柱穴の規模は径 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mである。方位は北で西へ傾く。出土遺物はなく、時期は不明である。

その他の遺構 調査区中央部を中心にピットおよび土坑群を検出した。大半は出土遺物がないため時期不明であるが、既述したように中には平安時代中期から鎌倉時代前期に比定できるものがあることから、これらの遺構は同時期に納まる可能性がある。

なお、江戸時代および時期不明の遺構は、整理の都合により平安時代から鎌倉時代の実測図に記載している。

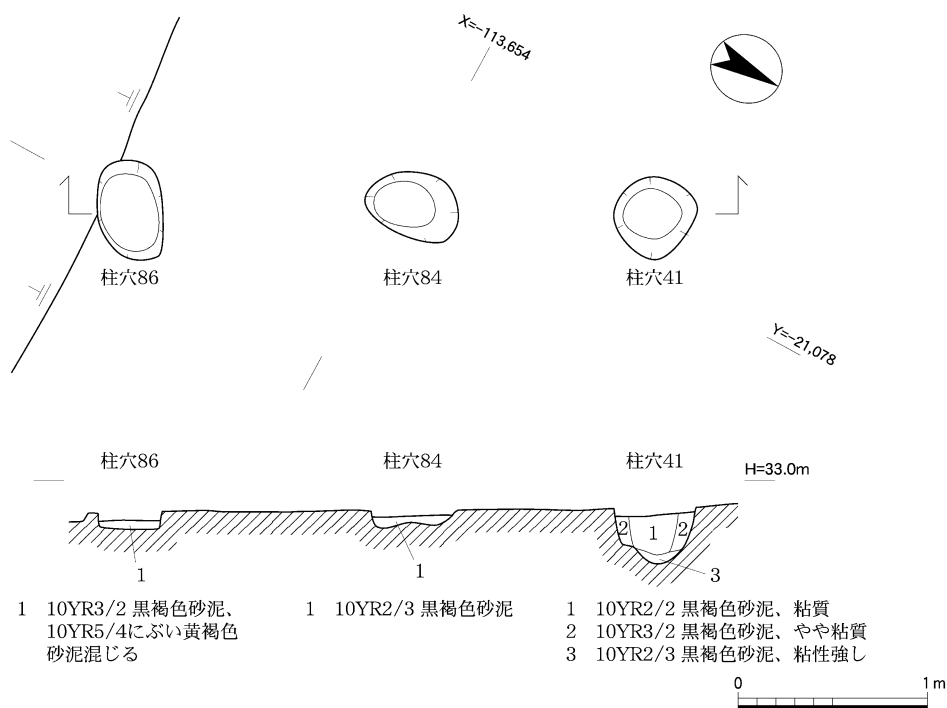


図 20 柱穴列実測図（1：40）

4. 遺 物

(1) 出土遺物の概要

遺物は整理箱で14箱出土した。出土遺物の内訳は、弥生土器が大部分を占め、他の時代の遺物は少量にとどまる。瓦類は平安時代と江戸時代のを合わせて、整理箱で約1箱である。

弥生時代の出土遺物は、溝・方形周溝墓から出土したものが多く、ほとんどが土器である。後世の遺構にも混入していたが、特に調査区西側の基盤層直上の整地層から多量に出土した。石剣もそのひとつである。

古墳時代の出土遺物は、少量小片であり、後世の遺構から出土したものである。出土土器には土師器甕や甑と思われる小片、須恵器蓋・杯・甕がある。

平安時代の出土遺物は、大部分が墓26から出土した平安時代中期の土器である。土器には、土師器皿・高杯、須恵器壺・甕・鉢がある。瓦類は平瓦・丸瓦が少量、軒丸瓦が2点ある。鉄製品には墓26から出土した釘と飾り金具と思われるものがある。

鎌倉時代の出土遺物は、少量小片である。土師器碗皿類小片、輸入青磁碗皿類の小片が1点、瓦類が少量ある。

江戸時代の出土遺物は、土坑29から出土したものである。その種類には、染付陶磁器碗、施釉陶器鍋・鉢、磁器碗、土製品人形、棧瓦・平瓦がある。

その他の時期の遺物は出土せず、全体として残存状態の良好なものは少なく、小片も含めて図示したものを記述する。

(2) 弥生時代の土器

弥生時代の土器は前期から後期のものが出土した。前期の土器が大半を占め、弥生時代の遺構

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器、石器		弥生土器65点、石剣1点	4箱	2箱
古墳時代	土師器、須恵器				
平安時代	土師器、須恵器、瓦類、鉄製品		土師器9点、須恵器2点、軒丸瓦2点、鉄釘1点	2箱	1箱
鎌倉時代	土師器、輸入陶磁器、瓦類				
江戸時代	染付陶磁器、施釉陶器、磁器、土製人形、瓦類				1箱
合 計		16箱	80点(6箱)	6箱	4箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

からほぼまんべんなく出土した。中期から後期の土器は周溝から出土している。溝 33 は前期の土器のみ出土した。それらの中から図示できたものを遺構ごとに記述する。

溝 33 出土土器（図 21、図版 4）（1）は壺蓋と考える。ほぼ中央部に径約 4 mm、長さ約 2 cm の小孔が貫通している。天井部外面はヘラミガキを施す。（2）は甕の口縁部である。口縁部は外反し、外面はハケメ調整、屈曲部にヘラ描沈線が 1 条ある。（3～8）は壺の口縁部である。3 は口縁部が外反して大きく広がる。外面はヘラミガキを施し、屈曲部にヘラ描沈線が 2 条あり突帯状になる。内面にもヘラ描沈線が 1 条ある。4 は口縁部が外反して広がる。外面の屈曲部にヘラ

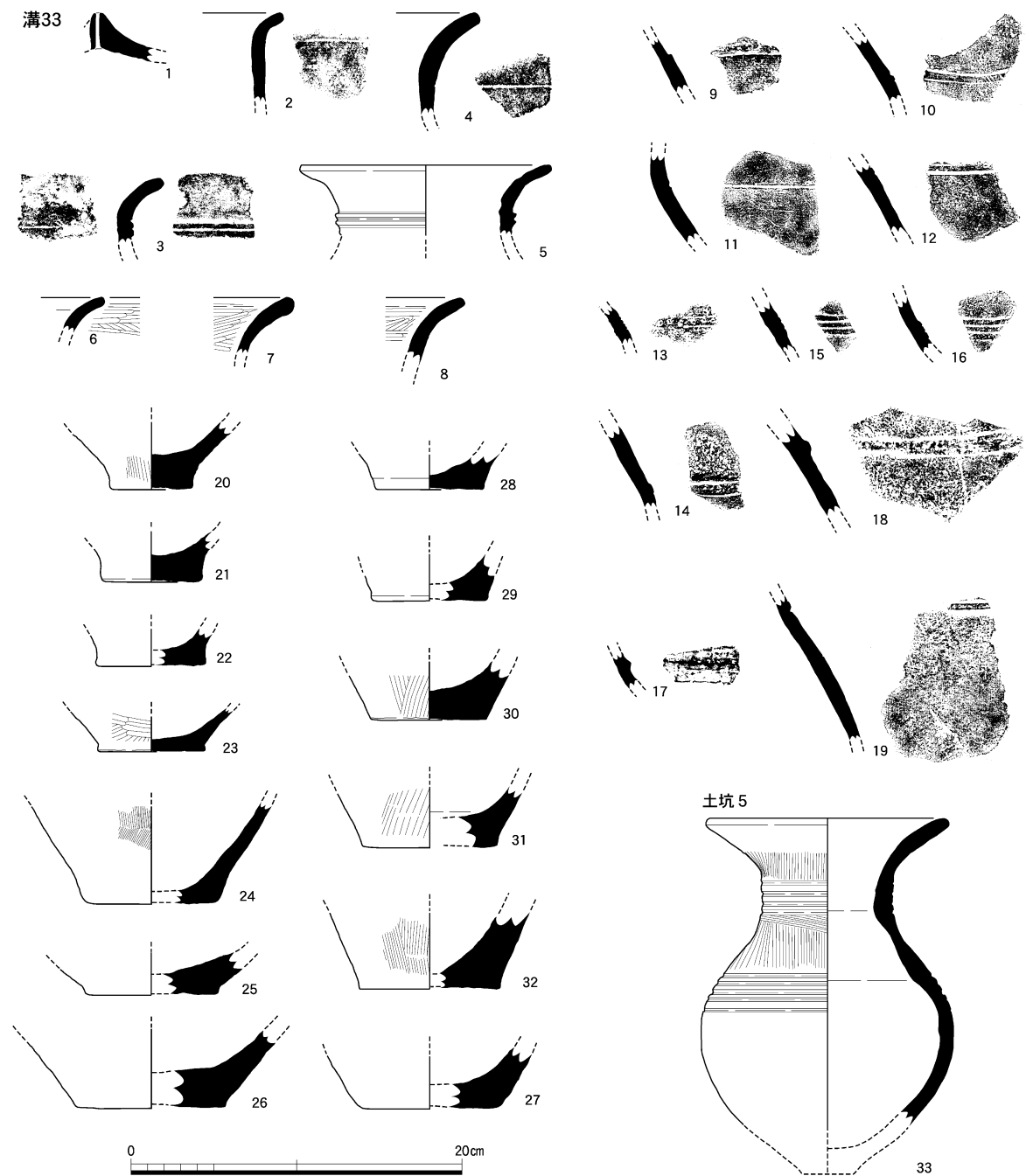


図 21 溝 33・土坑 5 出土土器実測図（1：4）

描沈線が1条ある。5は口縁部が外反して大きく広がる。外面は横ナデ調整であり、屈曲部に貼付突帯が2条ある。6～8の口縁部は外反して広がる。6は外面にヘラミガキ、7・8は内面にヘラミガキを施す。(9～19)は文様のある壺の体部である。9は外面に段を作る。10は外面に一部ヘラミガキを施し、ヘラ描沈線が2条ある。条線の上方はヘラケズリで段状である。11は外面にヘラ描沈線が1条あり、内面はヘラミガキを施す。12は外面にハケメ調整を施し、ヘラ描沈線が1条ある。13は外面にヘラ描沈線が3条あり、上2条間に竹管文を配する。14は外面に削出突帯が1条あり、その上下には細いヘラ描沈線がある。条線の上方は段状である。15は外面に貼付突帯が3条あり、内外面にヘラミガキを施す。16は外面に貼付突帯が3条あり、内面にヘラミガキを施す。17は外面に貼付突帯が1条あり、内面はヘラミガキを施す。18は外面に幅広の貼付突帯が1条ある。磨滅のため調整は不明瞭である。19は外面に貼付突帯が1条あり、内外面にナデ調整を施す。(20～22)は壺の底部であろう。底部器壁が厚く、体部の立ち上がりは外反して広がる。20は体部外面にハケメ調整、21は体部外面にナデ調整、22は体部外面にナデ調整を施す。(23～27)は壺か鉢の底部であろう。体部の立ち上がりは、外反して大きく広がる。23は体部外面にヘラミガキ、24は体部外面に縦ナデ調整、25・26は体部外面に横ナデ調整、27は体部外面に縦ハケメ調整を施す。(28～32)は甕の底部であろう。底部から体部が直線状に立ち上がり、他のものより傾きがきつい。28・29は体部外面に横ナデ調整、30～32は体部外面に縦ハケメ調整を施す。

土坑5出土土器(図21、図版4)(33)は壺である。頸部外面はハケメ調整を施し、4条のヘラ描沈線がある。肩部にも5条のヘラ描沈線がある。

溝1出土土器(図22、図版4)(34)は壺か鉢の受口状口縁部である。口縁部外面は斜めの刻目を、体部外面には斜めのハケメ調整を施す。(35)は壺の口縁部である。口縁部は大きく外反し、端部は拡張する。口縁部内面と端面に刻目を施す。(36)は皿形高杯の杯部である。杯部は途中で屈曲

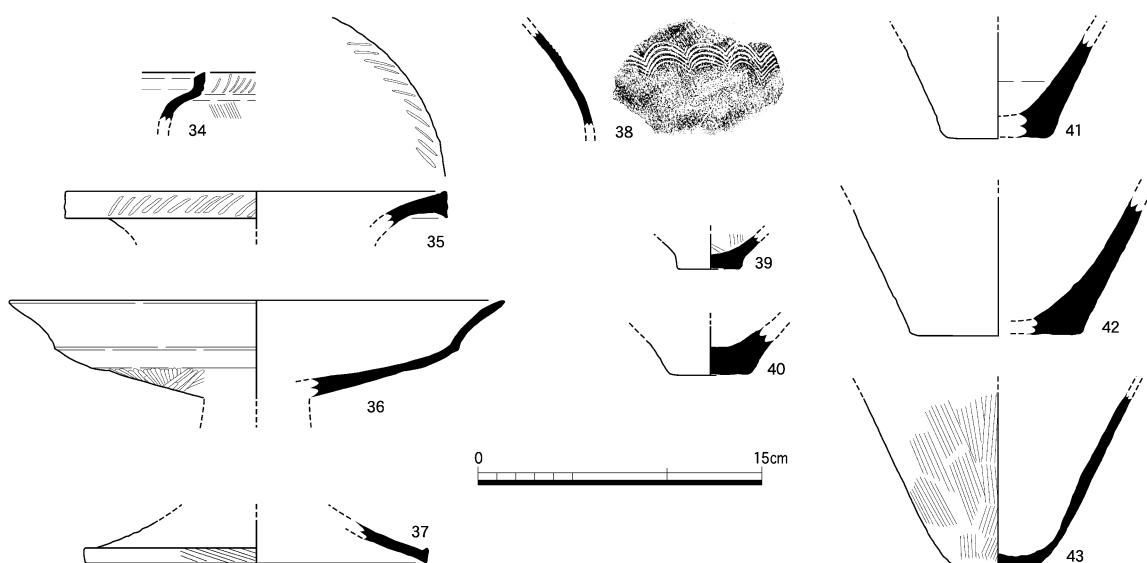


図22 溝1出土土器実測図(1:4)

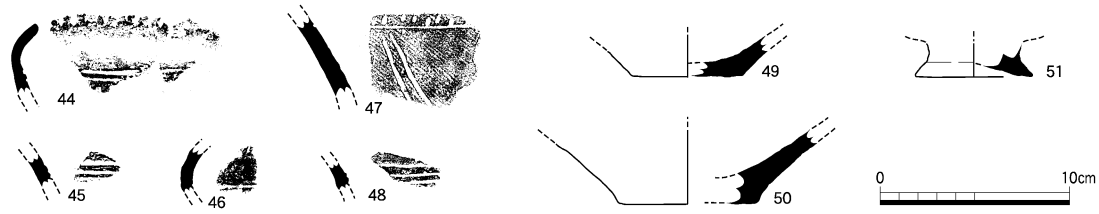


図 23 溝 2 出土土器実測図 (1 : 4)

し、外反する。外面は脚部接合部から杯屈曲部直前までヘラミガキを施す。(37)は高杯の脚部である。端部は上方に拡張し、外端面には斜めハケメ調整を施す。(38)は壺の体部か。外面に斜めのハケメ調整と櫛描きの上向き連弧文を施す。(39・40)は壺の底部である。39は内面にハケメ調整を施す。40は体部外面にハケメ調整を施す。(41～43)は甕の底部である。41・42は体部外面に縦ハケメ調整を施す。43は底部から体部が丸味を帯びて立ち上がり、器壁が薄い。体部外面は縦のハケメ調整を施す。

溝 2 出土土器 (図 23、図版 4) (44)は壺の口縁部である。口縁端部には刻目を、頸部外面にヘラ描沈線を 2 条施す。(45～48)は文様のある壺の体部である。45は外面に削出突帯が 3 条ある。46は体部外面にヘラ描沈線が 1 条ある。47は体部内面にヘラミガキを、外面はハケメ調整の後、ヘラ描沈線と縦の刻目を施す。また幅 2～3mm の沈線が斜めに 2 本ある。48は外面に貼付突帯が 3 条ある。(49・50)は壺の底部である。49は体部内外面にナデ調整を施す。50は体部外面にハケメ調整を施す。(51)は鉢の底部と思われる。体部外面はナデ調整を施す。

溝 21 出土土器 (図 24、図版 4) (52)は壺の口縁部である。頸部外面はナデ調整を施し、ヘラ描沈線が 3 条ある。さらに下方で削り出して段をなす。(53～55)は文様のある壺の体部である。53は外面にヘラミガキを施し、ヘラ描沈線が 1 条ある。54は外面にナデ調整を施し、ヘラ描沈線が 1 条ある。55は外面に横ハケメ調整を施し、ヘラ描沈線が 2 条ある。(56)は甕の底部である。体部外面・内面に縦ハケメ調整を施す。

溝 24 出土土器 (図 24、図版 4) (57)は文様のある壺の体部である。調整は磨滅して不明である。

外面には貼付突帯が 1 条ある。

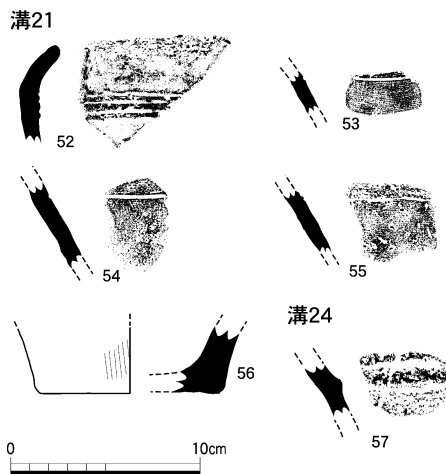


図 24 溝 21・24 出土土器実測図 (1 : 4)

溝 34 出土土器 (図 25、図版 4) (58～60)は甕の口縁部であろう。58は口縁端面に刻目を施す。調整は磨滅して不明である。59は頸部外面にヘラ描沈線が 1 条ある。調整は磨滅して不明である。60は内外面に横ナデ調整を施し、頸部外面にヘラ描沈線が 2 条ある。(61～63)は文様のある壺の体部である。61は内外面にヘラミガキを施し、外面にヘラ描沈線が 1 条ある。62は内外面ナデ調整を施し、外面にヘラ描沈線が 2 条ある。63は調整は磨滅して不明である。外面にはヘラ描沈線が 3 条と貼付文様がある。文様は円

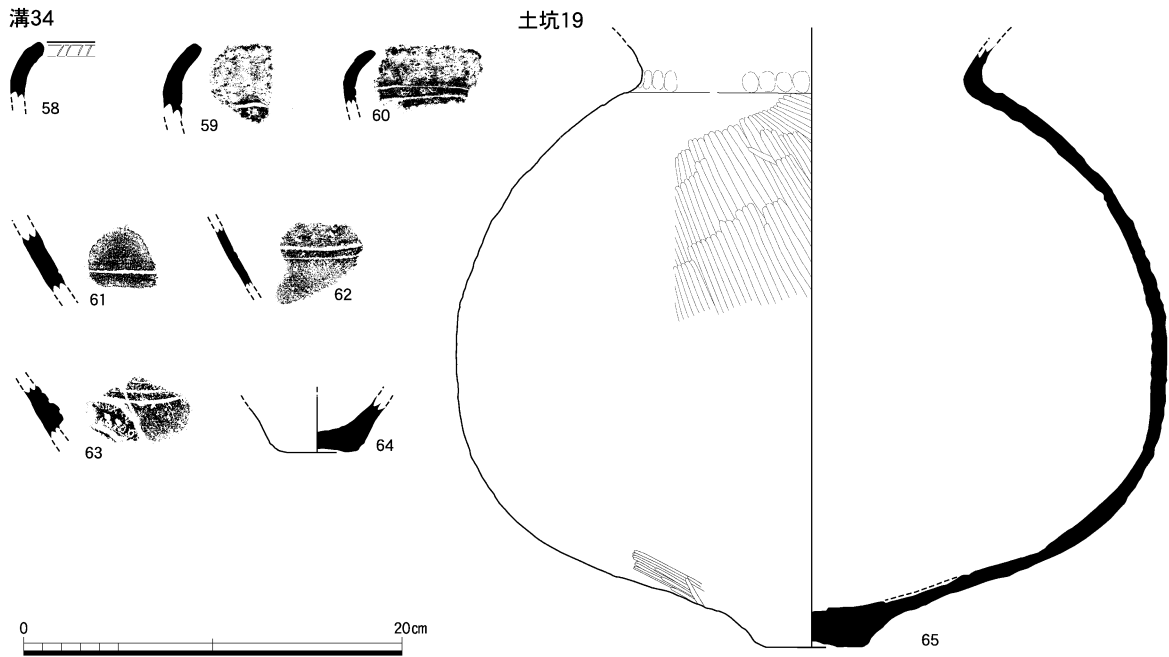


図 25 溝 34・土坑 19 出土土器実測図 (1 : 4)

形状と思われ、上面には小穴を配する。(64)は甕の底部であろう。内外面はナデ調整を施す。

土坑 19 出土土器 (図 25、図版 4) (65) は横に膨らむ壺である。口縁部は欠損している。磨滅のため調整は不明瞭であるが、体部外面の所々にヘラミガキが認められ、ほぼ全体に施していたと考えられる。頸部屈曲部外面にはオサエの指痕が巡る。内面はナデ調整を施し、粘土紐接合痕が残る。

(3) 平安時代の土器

墓 26 から出土した土器のみ図示できた。

墓 26 出土土器 (図 26、図版 5) (66～71) は土師器皿である。口径は 13.0～13.3 cm を測る。器壁は薄く、やや丸味のある底部に屈曲した口縁部が付き、口縁端部は上方へつまみ上げられる。底部から体部の内面には 1 部ハケメが残る。Ⅲ期古～中に属する。

(72～74) は土師器杯である。口径は 18.0～19.0 cm を測る。体部は底部からゆるく外上方へ開く。口縁部は屈曲し、端部は小さく上方へつまみ上げられる。底部から体部の内面には 1 部ハケメが残る。Ⅲ期古～中に属する。

(75・76) は須恵器壺である。75 は口径約 9.1 cm、底径約 7.8 cm、器高約 19.2 cm を測る。底部は平らで糸切り痕が残る。体部は外上方に内湾して立ち上がり、丸味を持った肩部からやや外反する頸部が付く。口縁端部は上方につまみ上げられ、下端は段を作り帯状をなす。76 は一回り小さく、底径約 6.2 cm、残存高 6.6 cm を測る。底部は平らで糸切り痕が残る。いずれも 9～10 世紀頃に比定できる。

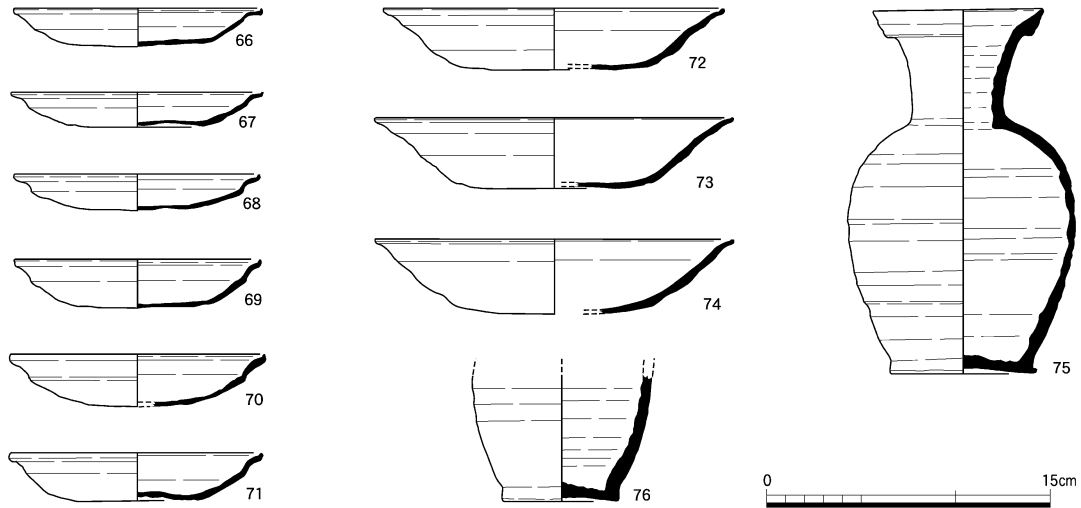


図 26 墓 26 出土土器実測図 (1 : 4)

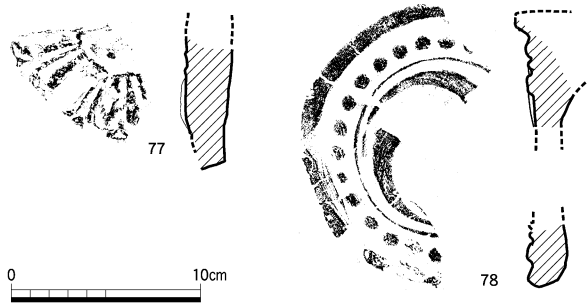


図 27 軒丸瓦拓影・実測図 (1 : 4)

(4) 瓦類 (図 27、図版 5)

(77) は複弁蓮華文軒丸瓦である。内区のみ残存する。複弁は 1 重の外郭線に囲まれる。中房は圈線で囲まれ、蓮子があるが数は不明である。調査区中央部の基盤層直上の整地層から出土した。(78) は巴文軒丸瓦である。右巻きの三巴文であろう。外区は珠文帯である。巴文の尾は圈線に接しない。土坑 67 から出土した。

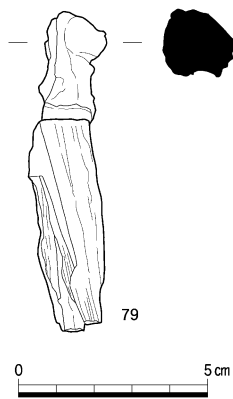


図 28 鉄釘実測図 (1 : 2)



図 29 鉄釘

(5) その他の出土遺物

鉄製品 (図 28・29) (79) は墓 26 から出土した鉄釘である。木棺を打ち止めたものであろう。残存長約 8.4 cm、胴最大径約 1.9 cm、頭部径約 1.8 cm、重さ約 25.7g を測る。頭部先端から約 2.9 cm は鉄釘が露出し、それから下方は鉄サビ化した木片が貼り付く。その境目は明瞭であり、鉄釘露出部の長さが木棺部材の厚さであろう。部材の樹種は針葉樹である。

石製品 (図 30・31) (80) は磨製石器の石剣である。全長約 19.3 cm、最大幅約 3.4 cm、最大の厚さ約 0.6 cm を測る。研磨し両面・両側に刃を作る。柄に当たる部分は長さ約 6 cm、剣先は長さ約 5.5 cm 前後である。縦のほぼ中央から研磨して薄くしていき、さらに幅 3 ~ 5 mm の刃先をつ

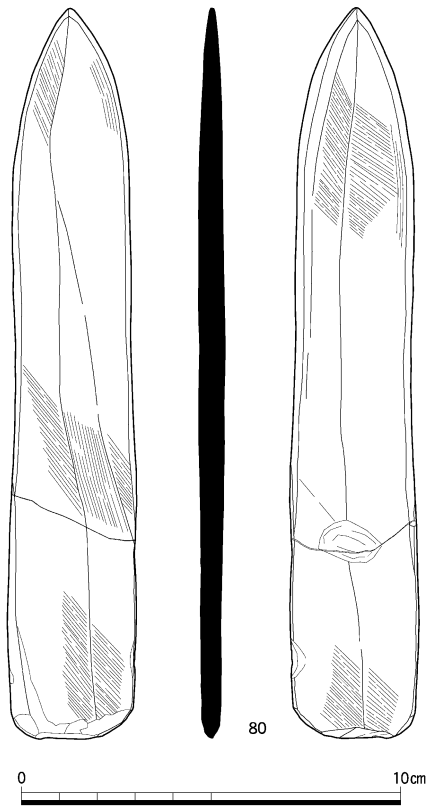


図30 石剣実測図（1：2）

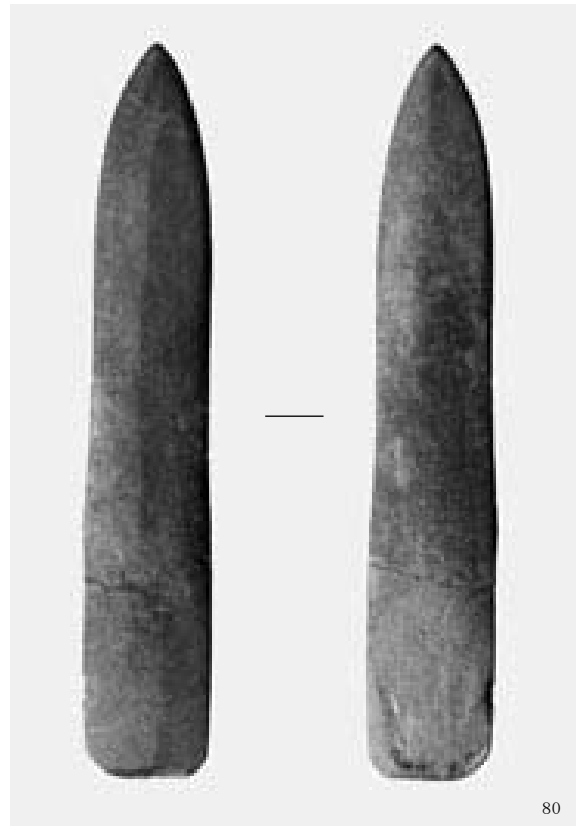


図31 石剣

くる。石材は粘板岩であろう。調査区西側中央部の基盤層直上の整地層から出土した。

自然遺物(図32) その他に溝2埋土と土坑5の壺(33)内の土から炭化米が出土した。

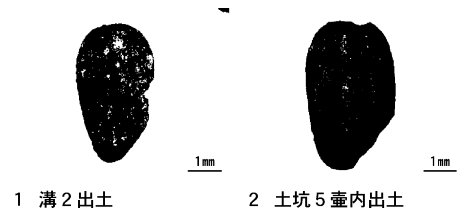


図32 炭化米

参考文献

森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 1990年

中川和哉ほか「雲宮遺跡」『京都府遺跡調査報告書 第22冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997年

柏田有香『平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-30（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年

表3 弥生土器一覧表

No.	器形(部位)	出土遺構	口径	口縁残存率	残存高	全体残存率	色 調	胎 土	焼成	備 考
1	壺蓋か	溝33上層			2.9		7.5YR7/6 橙	密、礫・長石少量混	良	
2	甕 口縁部	溝33下層			5.4	1/10以下	7.5YR 8/5 黄橙	密、礫・長石少量混	良	
3	壺 口縁部	溝33上層			3.9	1/10以下	7.5YR 6/4 にぶい橙	密、礫・長石微量混	良	
4	壺 口縁部	溝33下層			6.1	1/10以下	10YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石微量混	良	
5	壺 口縁部	溝33上層	15.1	2/10	4.2	1/10以下	2.5YR8/3 淡黄	密、礫・長石微量混	良	
6	壺 口縁部	溝33上層			2.5	1/10以下	5YR7/6 橙	密、礫・長石微量混	良	
7	壺 口縁部	溝33上層			3.4	1/10以下	5YR6/6 橙	密、礫・長石少量混	良	
8	壺 口縁部	溝33下層			4.1	1/10以下	10YR7/3 にぶい黄橙	密、礫・長石少量混	良	
9	壺 体部	溝33上層				1/10以下	5YR6/6 橙	密、礫・長石微量混	良	
10	壺 体部	溝33上層					7.5YR 8/2 灰白	密、礫・長石微量混	やや軟	
11	壺 体部	溝33下層				1/10以下	7.5YR 7/4 にぶい橙	密、礫・長石微量混	良	
12	壺 体部	溝33上層				1/10以下	7.5YR 7/4 にぶい橙	密、礫・長石微量混	良	内面に黒色付着物
13	壺 体部	溝33下層					7.5YR 7/4 にぶい橙	密、礫・長石微量混	良	
14	壺 体部	溝33上層				1/10以下	10YR3/1 黒褐	密、礫・長石微量混	良	
15	壺 体部	溝33下層					7.5YR3/1 黒褐	密、礫・長石微量混	良	
16	壺 体部	溝33下層					10YR8/3 浅黄橙	密、礫・長石微量混	良	
17	壺 体部	溝33上層					5YR6/6 橙	密、礫・長石微量混	良	
18	壺 体部	溝33下層				1/10以下	10YR8/3 浅黄橙	密、礫・長石少量混	やや軟	
19	壺 体部	溝33下層				1/10以下	10YR6/3 にぶい黄橙	密、礫・長石少量混	良	
20	壺 底部	溝33上層	5.0	全周	4.1	1/10	10YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石中量混	良	内面黒色
21	壺 底部	溝33下層	5.9	6/10	3.1	1/10以下	7.5YR 7/4 にぶい橙	密、礫・長石多く混	良	
22	壺 底部	溝33下層	6.5	3/10	2.3	1/10以下	7.5YR 7/4 にぶい橙	密、礫・長石少量混	良	
23	壺か鉢 底部	溝33下層	6.5	4/10	2.6	1/10以下	7.5YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石少量混	良	外面黒色
24	壺か鉢 底部	溝33下層	7.9	3/10	6.1	1/10以下	7.5YR7/6 橙	密、礫・長石多く混	良	外面の一部に黒色付着物
25	壺か鉢 底部	溝33下層	8.0	3/10	2.6	1/10以下	7.5YR 7/4 にぶい橙	密、礫・長石少量混	良	
26	壺か鉢 底部	溝33下層	8.9	3/10	4.7	1/10以下	10YR8/3 浅黄橙	密、礫・長石少量混	良	底部～体部外面の一部が黒色
27	壺か鉢 底部	溝33下層	8.2	3/10	3.7	1/10以下	10YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石多量混	良	
28	甕 底部	溝33上層	6.5	3/10	2.2	1/10以下	7.5YR6 /6 橙	密、礫・長石中量混	良	
29	甕 底部	溝33下層	6.9	3/10	2.8	1/10以下	7.5YR 7/4 にぶい橙	密、礫・長石中量混	良	
30	甕 底部	溝33下層	7.0	2/10	3.6	1/10以下	7.5YR 6/4 にぶい橙	密、礫・長石少量混	良	
31	甕 底部	溝33下層	8.0	3/10	3.7	1/10以下	7.5YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石少量混	良	
32	甕 底部	溝33上層	8.4	3/10	4.6	1/10以下	10YR7/4 にぶい黄橙	密、礫・長石多量混	良	外面淡黒色
33	壺	土坑5	14.2	4/10	18.5	4/10	5YR6/6 橙	密、礫・長石少量混	良	
34	壺か鉢 口縁部	溝 1上層			2.6	1/10以下	10YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石微量混	良	近江系か
35	壺 口縁部	溝 1上層	20.0	2/10	2.4	1/10以下	2.5YR5/6 明赤褐	密、礫・長石微量混	良	
36	高杯 杯部	溝 1上層	26.0	4/10	5.2	4/10	10YR8/3 浅黄橙	密、礫・長石微量混	良	
37	高杯 脚部	溝 1上層	18.0	2/10	2.2	1/10以下	10YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石微量混	良	36と同一個体か
38	壺 体部	溝 1上層				1/10以下	5YR5/6 明赤褐	密、礫・長石微量混	良	
39	壺 底部	溝 1上層	3.2	全周	1.9	1/10以下	5YR6/6 橙	密、礫・長石微量混	良	
40	壺 底部	溝 1	4.2	5/10	2.6	1/10以下	7.5YR6/6 橙	密、礫・長石微量混	良	
41	甕 底部	溝 1上層	5.4	3/10	5.6	1/10	10YR8/3 浅黄橙	密、礫・長石中量混	良	
42	甕 底部	溝 1上層	9.0	2/10	7.4	1/10以下	10YR8/3 浅黄橙	密、礫・長石中量混	良	
43	甕 底部	溝 1上層	4.6	7/10	9.1	1/10	7.5YR7/4 にぶい橙	密、礫・長石微量混	良	近江系か
44	壺 口縁部	溝 2			3.3	1/10以下	7.5YR7/6 橙	密、礫・長石少量混	良	
45	壺 体部	溝 2上層				不明	5YR7/6 橙	密、礫・長石微量混	良	
46	壺 体部	溝 2下層				不明	10YR8/3 浅黄橙	密、礫・長石少量混	良	
47	壺 体部	溝 2上層				1/10以下	10YR5/3 にぶい黄褐	密、礫・長石少量混	良	
48	壺 体部	溝 2下層				1/10以下	7.5YR8/6 浅黄橙	密、礫・長石微量混	良	
49	壺 底部	溝 2下層	5.8	2/10	1.6	1/10以下	10YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石中量混	良	
50	壺 底部	溝 2下層	7.2	3/10	4.0	1/10以下	10YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石中量混	良	
51	鉢 底部	溝 2	6.2	3/10	1.7	1/10以下	5YR6/6 橙	密、礫・長石多量混	やや軟	
52	壺 口縁部	溝21(東)			5.2	1/10以下	10YR6/4 にぶい黄橙	密、礫・長石微量混	良	
53	壺 体部	溝21(東)				1/10以下	10YR8/2 灰白	密、礫・長石微量混	良	外面黒色
54	壺 体部	溝21(東)				1/10以下	10YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石微量混	良	
55	壺 体部	溝21(東)				1/10以下	10YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石中量混	良	
56	甕 底部	溝21(東)	9.4	2/10	3.6	1/10以下	10YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石中量混	良	
57	壺 体部	溝24上層				1/10以下	7.5YR8/3 浅黄橙	密、礫・長石中量混	やや軟	
58	甕 口縁部	溝34上層			2.9	1/10以下	7.5YR6/6 橙	密、礫・長石微量混	良	
59	甕 口縁部	溝34下層			4.0	1/10以下	10YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石微量混	良	
60	甕 口縁部	溝34上層			2.9	1/10以下	7.5YR6/4 にぶい橙	密、礫・長石中量混	良	
61	壺 体部	溝34				1/10以下	5YR7/6 橙	密、礫・長石微量混	良	
62	壺 体部	溝34				1/10以下	7.5YR8/4 浅黄橙	密、礫・長石微量混	良	
63	壺 体部	溝34下層				1/10以下	7.5YR8/6 浅黄橙	密、礫・長石微量混	良	
64	甕 底部	溝34上層				1/10以下	10YR7/4 にぶい黄橙	密、礫・長石微量混	良	
65	壺	土坑19	5.2		31.8	5/10	10YR8/4 浅黄橙	良、礫・長石多量混	やや軟	頸部径18.0、体部最大径37.6

※ 単位は (cm)、径は主に復元値である。底部については、底部径と残存率を口径、口縁残存率の欄に記述した。

5. ま と め

今回の調査の最も大きな成果は、弥生時代の溝や方形周溝墓群を検出したことである。また、古墳時代から鎌倉時代の遺構も検出したことは、調査地の変遷を知る上で貴重な成果である。

調査で検出した最も古い遺構は、弥生時代前期の溝 33 である。この溝はその形状から人為的に開削したものと考えられ、何らかの区画施設の可能性がある。その溝 33 が廃棄され埋まった後、同中期に方形周溝墓群が作られる。周溝は共有する部分や並行する部分などがあり、大半は同一時期のものと考えられる。さらに、これらが埋没した後、一回り大きい方形周溝墓 8 が作られ、後期には廃棄されたと考えられる。

弥生時代の出土土器は、前期のものが大半を占める。これはこの時期に土器を多く使用した環境があったことを示す。また、周溝と壺の中から炭化米が出土したことから近隣に水田があった可能性がある。これらのことと少なくとも 2 時期にわたる墓域が存在することから、弥生時代には調査地近辺に集落が存在した可能性が高い。

古墳時代の遺構は、竪穴住居 1 棟のみである。また、主に調査区西部の後世の遺構から、少量小片の古墳時代の遺物が出土していることから、集落の一部であったことは確かである。

平安時代の主な遺構は、同中期の墓 26 である。墓 26 は木棺墓であり、炭で覆ったと考えられ、副葬品も多く、かなり手厚く葬った墓であることから、被葬者はそれなりの身分を有する人物と考えられる。平安時代中期は法性寺の造営時期であり、注目される遺構である。

鎌倉時代前期の検出した主な遺構は、南北溝 22 である。溝 22 はその形状から人為的な造作が加えられていると考えられる。溝の方位は北でやや東に振る。この地域の条里も北でやや東に振るが、溝 22 は条里の境に乗っていない。ほぼ同時期に造営された東福寺伽藍の南北中軸線も同じくやや東に振ることから、溝はこの東福寺と同じ地割で作られた可能性がある。また、溝の北の延長先には東西に流れる三ノ橋川があり、この川との関連性も深いと考えられる。

鎌倉時代後期以降は、耕作土と思われる層が堆積していることから、調査地は耕作地化していったと考えられる。

註

- 1) 金田章裕『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂 1985 年
福山敏男「法性寺の位置について」『佛教藝術 100 号』毎日新聞社 1975 年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほうしょうじあと							
書名	法性寺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-11							
編著者名	布川豊治							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうしょうじあと 法性寺跡	きょうととしひがしやまく 京都市東山区 ふくいねかみたかまつちょう 福稲上高松町 60番地	26100	548	34度 58分 31秒	135度 46分 09秒	2010年8月 30日～2010 年10月2日	423m ²	電波暗室 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
法性寺跡	寺院跡	弥生時代	方形周溝墓、溝、 土坑	弥生土器、石剣		この地域で初めて 弥生時代の方形周 溝墓を検出した。		
		古墳時代	竪穴住居	土師器、須恵器				
		平安時代	墓、落込み、溝、 土坑	土師器、須恵器、軒丸 瓦、鉄釘				
		鎌倉時代	溝、土坑	土師器、輸入陶磁器、 瓦				
		江戸時代	土坑	染付陶磁器、施釉陶器、 磁器、土製人形、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-11

法 性 寺 跡

発行日 2010年12月28日

編 集

発 行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961